

水子供養の発生と現状

森 栗 茂 一

-
- | | |
|----------------|--------------|
| 1 問題の所在 | 5 水子供養絵馬の具体例 |
| 2 例外としての近世水子供養 | 6 水子ビジネスの実態 |
| 3 間引きと再生 | 7 考 察 |
| 4 各地の水子供養の概観 | |
-

論文要旨

仏教には、水子を祀るという教義はないし、水子を各家で祀るという祖先祭祀も、前近代の日本にはまったくなかった。にもかかわらず、今日、「水子の霊が祟るので水子供養をしなければならない」と、人々に噂されるのはなにゆえであろうか。いわゆる1970年代におこり、80年代にブームを迎えた水子供養が、すでに20年を経過した今日、これを一つの民俗として研究してみる必要がある。

前近代の日本では生存可能数以上の子供が生まれた場合、これをどのように処理してきたか。一つには、予め捨られることを予期して、捨て子にする風があった。捨て子は、強く育つと信じられ、わざわざ捨吉などの名前をつけたこともあった。しかし、社会が育ててくれる余裕がないと思えるとき、間引きや墮胎がおこなわれた。暮らしていけないがゆえの間引きや墮胎を、人々は「モドス」「カエル」と言って、合理化してきた。実際、当時の新生児の生存率は低く、自然死・人為死に関わらず、その魂が直ちに再生すると信じて、特別簡略な葬法をした。

それでも、妊娠した女が子供を亡くすということは、女の心身にとっては痛みであり、悩みがないわけではない。しかも、明治時代以降の近代家族が誕生するにあたって、女は「良妻賢母」「産めよ増やせよ」「子なきは去れ」と、仕事を持たない「産の性」に限定された。そのため、女は身体の痛みの上に、社会的育徳という痛みを積み上げられた。そんな悲痛な叫びが、水子供養の習俗に表れている。

ところが、この女の叫びは、宗教活動の方向と経営を見失った寺院のマーケットにされてしまう。寺院や新宗教の販売戦略、心霊学と称するライターによって演出され、読み捨て週刊誌に取り上げられてひるまった。

明治時代以降の近代家族は、男の論理による産業システムのためのものであった。その最高潮である60年代の高度経済成長が終わった70年代に入って、水子供養が出てきていることは興味深い。産業社会の幻影が、女を水子供養に走らせた。その女を、寺院は顧客として受け入れた。こうして、女は金に囲いこまれて、水子という不安に追い込まれ、水子供養という安心に追い込まれていったのである。

そこで、彼女らの残した絵馬を分析することで、女の追い詰められた心理の一端を、分析してみたいと思う。